

往復書簡

今回は、竹崎 修央氏（高知県、(有)竹崎農園）と当機構理事長の高木勇樹との往復書簡 2 回目です。

拝啓 高木 勇樹 様

お返事ありがとうございます。

東京も春の気配から初夏の気配が感じられる季節になってきたでしょうか。まだ時折寒い日があり体調管理も大変です。

こちらは、早生のコシヒカリも田植えが終わり田圃が緑色になってきました。これからは中生のヒノヒカリの田植えの準備が始まります。

ハウスの果菜類も昨年から今まで収穫をしてきました。残り一・二ヶ月と今期の栽培も終わりが近くなり、ラストスパートに入りました。

高木様にお返事いただき、農業が十年前と比べてどう変わったかについては、切り口や見る人、見る方向によって変わるんだと思いました。地元は農業県でなおかつ県内一の専業農家率の地域です。この地域で野菜生産農業法人は自分のところだけです。そのため、少し地域の農家とは規模も考え方も違います。

そもそも大きくしようと思ったのは、二十代前半に行ったオランダの農業とアメリカの農業を見てからでした。今思うと良いことも悪いこともありましたが、今からだとなかなか二十代の時のような考えにはなりません。しかし、若い時にやろうと思っただのは良かったと思います。地域のほとんどの農家は、海外の農業を見に行く人はいませんが、海外の農業を見に行く人も少ないです。僕は若い農家に

は出来るだけ外に出て他の農業を見るのも勉強だぞとよく言っています。もつと若い農家が他の地域農業を見て頑張ってもらいたいです。

自分も頑張らなくてはいけませんし、後継者を育てなければなりません。息子が継げる農業経営ができればいいのですが、息子もやりたい事があるみたいですから、他人でもやる気のある者に経営を継いでもらえればと思いますし、継いでもらえない農業法人にするように頑張りたいと思います。今後もし指導宜しくお願いします。

平成二十五年五月吉日

敬具

竹崎 修央(たけざきのぶお)

有限会社竹崎農園（高知県）
一九六八年 高知県安芸郡芸西村生まれ
一九八七年 タキイ園芸専門学校卒業
一九八七年 就農
現在（有）竹崎農園でナス、ピーマン、ニラ、シヨウガ、マンゴーを生産しております。



拝復 竹崎 修央様

連休もあつという間に過ぎ、東京も夏日の気温が珍しくない日が続く、今日この頃です。

貴兄におかれては、田植え、野菜栽培と超多忙な毎日をお過ごしのことと存じます。

しかも毎年気象は同じであることはなく、気の安まるときはないのではと思います。

日々忙しく動き、働いていると、誰しも「変化」を感じず暇もないというのが実感でしょう。何年か経って振り返ってみてはじめて身の回りの変化（アナログからデジタル、ケイタイからスマホなどなど）や周りの人の生活の変わり方などから、ああこんなに変わったんだと思うことが多いのだと思います。

最近、特にこの変化のスピードが早まっているように感ずるのは私だけではないはずですよ。

貴兄のように、正に春秋に富む若い時に、海外の農業をみたりして自らの経営を冷静に観察することが出来れば、若さの力で、失敗を恐れず思い切った変化に挑戦するのです。

この行動の差が時間の経過とともに経営内容、考え方の大きな差になるのだと思います。

また、自らのものさし、感性を豊かにし、失敗も成功の糧にしようのだと思います。

貴兄が目指しておられる経営のかたちは、私が思い描いている、農業を産業として、持続する経営を行う「持続的農業経営体（農地、人、技術、企画販売力、管理能力を経営資源とする総合知識集約産業）」だと思います。

このような経営体では人材育成は最も大事で、経営を継ぐ者は、息子さんでも他人でも、やる気のあがる者なら可能となりますし、むしろそのような人材が自然と育つようになると思います。

貴兄の作り上げた事業とその理念は、きちんと継承され、時代の変化に対応しながら持続する農業として、地域の雇用の場、活力の源になり、発展を続けることを確信しています。

期待しています。是非成し遂げて下さい。

平成二十五年五月吉日

敬具

高木 勇樹（たかぎ ゆうき）

一九四三年 群馬県生まれ
一九六六年 東京大学法学部卒業後農林省入省。食品流通局砂糖類課長、大臣官房企画室長などを経て、食糧庁管理部長、畜産局長、大臣官房長、食糧庁長官など歴任。

一九九八年 農林水産事務次官、二〇〇一年退官
二〇〇二年 農林中金総合研究所理事長
二〇〇三年 農林漁業金融公庫総裁、二〇〇八年同公庫退任
二〇〇七年 NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長

現在、NPO法人日本プロ農業総合支援機構副理事長などの立場から、わが国農業・農村の活性化、食の問題の解決に向けた活動に尽力。

